

組織目標評価報告書（平成26年度）

部局名： 岡山大学病院

目 標	目標の達成状況(成果)及び新たに生じた課題への取組 (部局での検証とそれに対する取組)
<p>①教育領域</p> <p>①-1 目標 教育面では、病院の理念に掲げている「優れた医療人の育成」の実践として、引き続き学部学生、大学院生、研修医、看護師、医療技術職員等の教育環境、労働環境の改善整備及び医療スタッフに対する研修の充実を図るとともに、連携のとれたチーム医療のための研修を実施してレベルアップを図る。</p>	<p>自己評価</p> <p>教育面では、主に次のような成果をあげることができた。</p> <p>①医科研修部門では、主に外科系の学生教育の充実や卒業臨床研修指導者育成を目的とした外科系指導者養成講習会を6月に開催した。</p> <p>②医科では、医療安全管理能力の向上ならびに研修医、女性医療人、復職医の支援のため、地域医療人育成センターおかやま(マスカットキューブ)を有効活用して、シミュレーター及びベッドサイド教育用超音波診断機器を用いた教育を実施し、歯科では、新たなシミュレーション教育プログラムとして「むし歯科診療コース」を4月に開設した。</p> <p>③ 医科は新規採用時のオリエンテーションで、医療人としての倫理等の教育を行うとともに、医療安全に関する知識を身につけるための研修を行った。</p> <p>④歯科は、他大学病院との交流として、6月から10月まで歯科衛生士の学外研修を実施するとともに、日本歯周学会認定歯科衛生士取得のために10月に技能研修、11月に講習会を実施した。</p> <p>⑤外科系診療及び実習における患者安全教育の啓発と普及を目的とした外科系指導者養成講習会を開催した。</p> <p>教育環境の改善として、臨床研修プログラムを更に充実させるため、「専門医へのロードマップ」の2014年版への改訂作業を行い、今年度一部の診療科で地域枠医学生のキャリアパスについて内容の追加するとともに、歯科研修部門では、研修施設見直しを行い研修医ニーズに応じた新たに2施設を追加登録し、充実を図った。</p> <p>労働環境の改善としては、入院棟11階に職員の憩える場を整備する計画を検討した。また、病院職員の労働意欲の高揚を図る目的で設置した、病院長が表彰する「楷の木賞」について、本年度も個人及びチームに授与し、功績を讃えた。</p>
<p>①-2 目標とする(重要視する)客観的指標</p>	
<p>②研究領域</p> <p>②-1 目標 研究面では、臨床研究中核病院整備事業として、新医療研究開発センターを中心に、中央西日本臨床研究コンソーシアムの強化及び中国、四国地区の国立大学病院間の連携強化を図り、円滑な臨床研究実施体制を構築する。 また、倫理委員会を統合再編し、効率的かつ質の高い倫理審査体制を構築するとともに、学内の研究倫理に対する教育、研修の充実を図る。</p>	<p>自己評価</p> <p>臨床研究中核病院整備事業では、新医療研究開発センターを中心となって、小児・稀少疾患難病等疾患別ネットワークを形成し、医師主導治験でなければ実施困難な研究の支援や、国際水準の臨床研究においては中国四国地方の基幹病院とのネットワーク(中央西日本臨床研究コンソーシアム)を活用し、大規模な臨床研究や治験を迅速に実施する臨床研究メガホスピタルを目指している。12月には中国四国地区のすべての国立大学病院が参加し、国立大学病院臨床研究推進会議第3回中国四国地区連絡会を、2月には第4回を開催した。1月には同じメンバーでTV会議を行い、連携して臨床研究の推進を図って行くための協議を活発に行った。</p> <p>また、9月には、文部科学省「橋渡し研究加速ネットワークプログラム」新規拠点事業に採択され、健康寿命の延伸を目指した次世代医療を実現するための体制の整備を進めている。</p> <p>さらに、平成26年4月から生命倫理審査委員会を設置し、これまで縦断的に編成されていた各種倫理委員会を横断的に再編することで、書式の統一化と生物統計家などの専門家による研究実施計画のブラッシュアップを行っている。研究計画書を事務局に採用した教員がチェックし、科学的妥当性と倫理的妥当性がより一層担保できる体制とした。</p>
<p>②-2 目標とする(重要視する)客観的指標</p>	
<p>③社会貢献(診療を含む)領域</p> <p>③-1 目標 1. 社会貢献面では、引き続き、岡山県が構築した地域医療連携システム「晴れやかネット」を利用し、前方支援及び後方支援連携の施設拡大を図り、地域の高度医療に対する要請に応える拠点医療機関としての機能を果たす。 2. 診療面では、ロボット手術をはじめとした低侵襲医療や移植医療の拡大など先進医療を推進し、安心・安全な医療を提供して、引き続き「最後の砦」としての大学病院の役割を果たす。 3. 運営面では、総合診療棟Ⅱ期及び既存建物の将来計画について更に検討を進めるとともに、適正な経営を図るために引き続き経費の節減、適切な設備投資及び人員配置を行う。 また、病床稼働率の向上・安定化を図る。 4. 国際貢献として、ミャンマーなどに対し国際医療支援を行う。</p>	<p>自己評価</p> <p><社会貢献> (1) 地域医療連携システム『晴れやかネット』の運用上の講習として、医療ネットワーク岡山協議会の協力により、1月に利用者資格取得説明会を開催した。併せてシステムの問題点改善を同協議会に要望を行った。 また、外来における「晴れやかネット」利用のオンライン予約に関しては、関係医療機関へ、紹介患者予約において利用できる旨の周知を9月に行うなど、予約枠の拡大の活動を行った。現在、同システムの接続時間など課題に向けた検討を行っている。 さらに地域歯科医療との連携においても、医科歯科統合で稼働する「晴れやかネット」の県内歯科医療界へ普及を図り、院内での講習会の受講の周知や、県内の病院歯科にも登録の呼びかけにより、登録者を得ている。</p> <p>(2) 地域の高度医療に対する要請に応える中核的医療機関としての機能の充実としては、次のことがあげられる。 ① 4月に肉腫患者のために診断からリハビリまで複数の診療科等と連携して適切な治療を行うサルコマーセンターを設置した。</p>

- ② 4月に看護部及び大学院保健学研究所の連携より看護師の看護実践能力開発のための研究と教育を行う看護研究・教育センターを設置した。
院内の看護の質を上げるべく、看護倫理委員会研究部会の体制強化や他職種との抄読会を行っている。また、本院をはじめ訪問看護ステーションや他病院の地域看護職に対する教育プログラムの開発を行っており、新任研修やフィジカルアセスメント研修をはじめ、未就業者の研修セミナーを支援している。
- ③ 8月には成人を迎えて以降も長期にわたる継続診療が必要な先天性心疾患の患者のため、循環器内科、小児循環器科、心臓血管外科等の複数の診療科等が連携して診療にあたる成人先天性心疾患センターを設置した。

③-2 目標とする(重要視する)客観的指標

医療収入、診療経費、病床稼働率

<診療>

総合診療棟に配置した血管造影装置併設のハイブリッド手術室や、最先端のCTやMRI、血管造影装置、手術中にMRI撮影を可能とするオープン型のMRI装置などの最先端の医療機器を使用し、脳神経外科手術をはじめ心臓血管外科手術など高度な手術を行っている。

また、臓器移植では、肺、肝臓など、改正臓器移植法の全面施行後順調に実績を重ねており、肺移植では9月に、世界初で、かつ国内最年少の移植の事例となった。母親の肺の下葉を分割して2歳児に移植することに成功している。現在までの主な実績として、肺が138例、肝臓が348例に達している。

さらに内視鏡手術ロボット「ダ・ヴィンチ」を用いた医療では、現在前立腺治療、腎切除、胃切除、子宮摘出と治療範囲を拡大し順調に実績を伸ばしており、腎がんに対するロボット支援腹腔鏡下腎部分切除術(先進医療)を行う医療機関として厚生労働省から認定され、12月から開始した。内視鏡手術ロボット「ダ・ヴィンチ」を用いた医療の実績として、現在前立腺治療315例、腎切除11例、胃切除12例、子宮摘出17例を実施している。本院では総合診療棟を中心に、これらの高度な医療を展開しており、今年度の手術件数は9,500件を見込んでいます。

その他、本院の特徴でもある遺伝子治療においては、前立腺がんにおけるREIC遺伝子治療が26例に達している。また、悪性胸膜中皮腫におけるREIC遺伝子治療をはじめ、新たな腫瘍選択的融解ウイルス「テロメライン」を用いた放射線併用ウイルス療法法の臨床研究を実施している。

<運営>

病院では、病床稼働率、診療費用請求額等の経営指標を迅速に把握して経営戦略会議で報告し、随時検証や対策を講じている。また、MBO(目標管理)については、平成25年度に引き続き、病院長ヒアリングを各診療科に加え各センターも含めて、6~7月に実施した。具体的には、稼働率向上のため稼働が低い診療科についてその理由を確認し、対応策を検討するとともに、9月には中間評価を実施し、収益額(診療費用請求額から患者診療経費を差し引いた額)が前年度比でマイナスの診療科に対しては現状や改善への取組状況の聞き取りを行った。更に2月には診療科等から自己評価を提出させ、経営戦略会議及び執行部会議で最終評価に向けての検討を行うなど、病院経営の向上に努めた。

さらに、病院経営に影響する病床稼働率の向上にも注力し、病床マネジメントの仕組みとして昨年度配置した病床管理担当者を中心に、病棟間の調整を引き続き行っており、4週連続病床稼働率が85%未満の場合に1床、80%未満の場合には2床を「病床マネジメント病床」として当該診療科から拠出させるという基準のもと病床管理担当者の権限により病床の運用を行うとともに、本年度は新たに、各病棟の入退院の日程の偏りを軽減し、入退院の判断・決定を行う医師(リンクドクター)を配置し、各病棟看護師長及び病床管理担当者と連携を強化する取組を開始し、稼働率向上への改善の強化を図った。(平成27年3月2日までの本年度の稼働率は89.1%)

今年度は、診療報酬改定(実質マイナス改定)や消費税増税、また、手術から投薬への転換という医療の変化など、社会的要因が主因による収支差額の不足という事態が生じたことから、今後、早急に合理化、効率化に沿った取組みを進めることとした。

<国際貢献>

国際貢献としてあげられる主な取組みでは、ミャンマーに関する国際医療貢献担当として平成26年度に設置した病院長特命補佐を中心に、4月に中国四国がんプロの一つとして、ミャンマー・日本高齢者癌ケアセミナーを開催し、ミャンマー医師会代表者5名を招き活発な討論が行われた。6月には、マンダレー学長の本院表敬訪問に併せ今後の医療教育支援に関する協議を行った。ミャンマーからの研修生受入れとして、7名の医師と1名の検査技師が1ヶ月から3ヶ月滞在した。さらに1月には本院の臨床系4科と看護部の12人の合同チームによる現地医療支援と臨床系教員7名による現地学会での講演を行った。2月には乳腺外科2名による乳がん検診をマンダレーで開始、看護研究・教育センターから3名が現地看護大学を訪問し、今後の看護教育支援について協議した。

また、1月にミャンマー保健省主催の学術集会で口腔がん検診ならびに歯科口腔保健活動に関して講演を行うとともに、次年度の口腔がん等の検診の実施に向けた現地での検討を行った。

平成27年度は7月に現地で歯科を中心とした口腔がん検診を予定するとともに、JICA・6大学による大型医療人材育成プロジェクトが始まり、夏には救急領域を中心したミャンマー人の研修と、現地でのセミナーを行う予定である。

【総括記述欄】

平成26年度の組織目標の達成状況は、病院全体として優れたものであったと考える。特に、平成26年度に新たに設置したセンターは、岡山県をはじめ地域との連携により円滑な運営が行われており、岡山県の中核を担う拠点病院としての役割を十分に果たしていると言える。

遺伝子治療や臓器移植手術、また内視鏡手術ロボット手術においても順調に実施されており、移植手術では世界初の成功例や内視鏡手術ロボット「ダ・ヴィンチ」では主に前立腺摘出術に使用していたが、治療範囲がさらに拡大されその症例数も順調に伸びている。総合診療棟をフルに活用してこれらの高度な手術の実績を伸ばしており、今後は年間手術件数1万件以上を目標とし、「最後の砦」病院の使命を果せるよう努力する。

さらに、昨年度採択された臨床研究中核病院整備事業では、小児・稀少疾患難病等疾患別ネットワークや、中国四国地方の基幹病院とのネットワーク(中央西日本臨床研究コンソーシアム)を活用し、着実に事業を推進するとともに、9月に採択された、文部科学省「播流し研究加速ネットワークプログラム」新規拠点事業では、健康寿命の延伸を目指した次世代医療を実現するための体制の整備を進めている。

運営面では、今年度は診療報酬改定(実質マイナス改定)や消費税増税、また、手術から投薬への転換という医療の変化など、社会的要因が主因による収支差額の不足という事態が生じたため、今後、早急に合理化、効率化に沿った取組みを進めることとなった。